

Contents ▶

- 1 新体制の発足にあたってー第1回全体会議における挨拶より 2 研究機能の強化、活動の継続性、連携の構築を柱に
3 IR部門の目玉企画 4 構成員

1 新体制の発足にあたってー第1回全体会議における挨拶より

学長 三谷 高康

新学期を迎え、鈴木克夫先生に大学教育開発センター長として就任していただき、新たな気持ちでの出発となりました。前年度から継続して研究員を続けていただく教職員の皆さん方、そして新たに加わって下さった二人の教員方という新構成の顔ぶれによる最初の会合となりました。

もう皆さん方をご存知のことと思いますが、大学の教育方法は大きく様変わりをしています。アクティブラーニングと呼ばれる授業方法による学習効果の向上化、また、ICTをはじめとする技術的なイノベーションもさることながら、高等教育のグローバル化や知識基盤社会の到来等、時代的また社会的背景による大学教育への期待も高まっています。さらに、文科省からの競争的資金が絡んだ教育革新への強い要求も加わり、大学教育は歴史的に見て今までにない大きな転換期にあると云っても過言ではありません。

加えて、学生の多様化は看過出来ない状況にあります。学力やモチベーションの違う学生たち、国籍や文化の異なる学生たちが入学しています。

昨日、年度の初めですのでチャペルアワーに顔を出したところ驚いたことがありました。春学期の授業が始まってまだ2週間目にもかかわらず、礼拝堂にかなりの数の学生が既に集っているのです。しかも、会堂内が静粛なのです。おしゃべりの声がほとんど聞こえないのです。

必須科目の「キリスト教入門」はチャペルアワーの出席を宿題としており、春学期はLA学群、秋学期はその他3学群と云う時間割配置になっているため、出席者のほとんどはLA学群の一年生の学生達です。その学生たちが、チャペルアワーの開始を黙って待っているのです。今後、慣れてくるとどう変化するか楽しみです。しかし、5～6年前まではおしゃべりが絶えず、何度も司会者が注意していた礼拝堂だったのですが、最近では学生の出席態度の徐々に変化して騒がしさが消えていきました。チャペルアワーだけの現象ではありますが、学生たちが確かに変わって来たのは事実です。ところが、どう変わってきたかと問われると、答えるための客観的な資料を持ち合わせていません。

今年もオリエンテーションの期間中にベネッセによる「大学生学力基礎レポート」を行いました。学生の学力の実態を実証的に把握して授業や学生指導等だけでなく、アドミッションも含めて総合的に広く役立てたいという意図から4年前に始めたものです。学生の変化を十分に分析できる情報量は蓄積できたと思います。大学教育開発センターのIR部門では、この基礎調査を毎年分析して、その報告を出していただいています。今後はさらに詳細に分析し、教育改革への提言をしていただければと思っています。

実は、先日の学長室会議で授業の公開について話し合いました。そして、是非とも今年度から実行しようとなりました。教員同士が互いに学び合いながら授業の質の向上を図ることは、全国の大学ではもう当たり前のこととなっています。桜美林大学ではGPA制度を全国の大学に先立って導入し、それに伴うキャップ制や卒業要件の整備、更にはアドバイザー制度やオフィスアワーの設定等を通じて、実質的な学修効果を図って来ました。ところが、現在では他の大学がさらに先進的な試みを積極的に実践しています。

今こそ、私たちは初心にかえて改善に向けて取り組まなければなりません。

今後、学士課程では学類化とそれに伴う定員増など改革は進んでいきますが、そうして過渡期に、是非、大学教育開発センターでは教育の質の向上、教職員の能力開発に、また情報の分析と集積等に引き続きご尽力いただきたく願っています。

そして、教育に関することなら、遠慮なく学長室へ提言をしていただければと思います。

鈴木先生の優れたご指導の下に、皆さん方が力を出し合って実りある業務が展開することを願っています。

(2016年4月20日)

2 研究機能の強化、活動の継続性、連携の構築を柱に

大学教育開発センター長 兼 FD・SD 部門主任
心理・教育学系/大学アドミニストレーション研究科 教授 鈴木 克夫

このたび、山本眞一前センター長の後任としてセンター長に就任いたしました。また、当面は、FD・SD 部門主任を兼ねさせていただくことになりました。微力ではありますが、皆様のご期待に応えるべく、努力してまいりますので、ご支援のほどお願い申し上げます。

当センターは、本学の授業（大学院の研究指導を含む）の内容および方法の改善を図るための組織的な研修および研究を支援・推進すること、ならびに本学の教育活動等の状況を明らかにして、広く国内外の理解と支持を得るための諸施策を支援・推進することを目的として、2008 年度に設置されました。以後、FD（教員の能力開発）、SD（職員の能力開発）、IR（情報の評価・分析）の三つの活動を通じて、本学の教育改善・改革に寄与するよう努めてまいりました。私事ではありますが、設置当初は IR 部門主任として『Fact Book』の刊行に携わり、山本前センター長のもとでは FD・SD 部門主任として FD・SD に関するシンポジウムの企画を担当させていただきました。

センター長就任にあたり、これまでの8年間にわたる研究員としての経験を踏まえ、以下の3つを運営方針として掲げさせていただこうと思っております。第一に、研究機能の強化です。研究員の皆さんは、それぞれが「研究」を行い、その成果を学内外に発信することで「業績」を残してほしいと考えます。第二に、活動の継続性です。センターでは、シンポジウムの開催や『Fact Book』をはじめとする刊行物の発行、他大学への視察・訪問、研修会等への参加など、多くの業務がありますが、それらを単発で終わらせず、一貫した問題意識のもとに継続的な活動として取り組んでもらいたいと思っております。第三に、学内の各教育組織および事務組織、あるいは他大学、他機関との連携の強化です。センターは、単独では力を発揮することはできません。連携することで、両者にとってメリットが発生するような Win-Win の関係を築いていく必要があると考えます。

以上の方針のもと、すべての教職員の皆様とともに、本学の教育改善・改革のためのさまざまな課題に取り組んでまいりたいと存じますので、暖かいご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

3 IR 部門の目玉企画

大学教育開発センター IR 部門主任
経済・経営学系/ビジネスマネジメント学群 教授 藤田 晃

平成 25 年度より、文科省が推奨する取り組みの実施状況に応じて経常費補助金を傾斜配分する「私立大学等改革総合支援事業」が始まり、IR に取り組んでいると加点されようになったといわれている。それまで IR に余り取り組んでこなかった大学で、IR 室などの設置が急ピッチで進んでいる。本学の大学アドミニストレーション研究科の通信教育課程で「データ解析論」を担当しているが、昨年度の履修生の半数は、IR などの担当になったことを履修の動機にあげていた。

本学の IR への取り組みは早く、2008 年に組織的に IR 活動を始めており、すでに 2015 年まで 8 年間の貴重なデータの蓄積がある。志願者数を定員で除した入試倍率の推移を分析したところ、大学全体では非常にゆるやかに低下する傾向にある中で、芸術文化学群の V 字回復が明らかになっている。

本年度の IR 部門の活動計画の目玉として「Fact book の説明会（仮称）」を行うことになった。上述の入試倍率の推移分析など重要なトピックスについて、関係各部門の方々との共同研究をすすめて、「説明会」で報告したいと考えている。各部門の皆様のご協力をお願いする次第である。

4 構成員

センター長	鈴木 克夫（心理・教育学系/大学アドミニストレーション研究科）
FD/SD 部門主任	鈴木 克夫（兼任）
研究員	阿部 温子（法学・政治学系/リベラルアーツ学群）
同	有賀 清一（総合科学系/ビジネスマネジメント学群）
同	兼田 麗子（経済・経営学系/ビジネスマネジメント学群）
同	福田 潤（総合科学系/健康福祉学群）
同	石川 将史（人事課）
同	犬飼 佳宏（学生生活支援課）
同	佐藤 誠治（教育支援課）
IR 部門主任	藤田 晃（経済・経営学系/ビジネスマネジメント学群）
研究員	大中 真（人文学系/リベラルアーツ学群）
同	藤川まなみ（総合科学系/リベラルアーツ学群）
同	井上 久（経理課）
同	糸川 二郎（情報システム部）
同	鳥居 聖（人事部）
同	松井 麻紀（入試事務室）

（2016年6月30日現在）

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター

〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758 其中館1階 101 TEL.042-797-2918 FAX.042-797-6398

E-mail : fdcenter@obirin.ac.jp Web : <http://www2.obirin.ac.jp/fdcenter/>